はかくら

らぐかは

一碧楼の句集

この本は
私のためには
懐かしく、また痛ましい
墓窖(はかぐら)です。

「日本俳句」に没頭して居たお坊ちやんの時代、
「自選俳句」で個性尊重、老大家叫児を絶叫して、他人樣(ひとさま)から
謀叛人よと罵られた時代、
「試作」を起して建設に苦勞した時代、
この期間の句から氣儘に選み出した數十句です。句集を
編まうと選み出した最初の句は七百句近くもありました
が、いくら削除しても氣に喰はない。

實際この頃の句の多くは「本當の私」ではなかつたのです。
私の個性、私の行き方、つまり私の歩いて來た道筋を明かに
表はしたいのが本望でこの句集を編んだのです。
また一方には日本俳句抄などに載つてる私の句を見ると
自分ながら「本當の私」の句と思へぬのが多いのです、道理、選
者といふ篩を通して居るのですから。
で、どうしても私自身から見た「本當の私」の句を集めればな
らぬと思つたのです。

この句集以後の作物即ち試作の後半期から現今(いま)の第一作
の句は近く私の第二句集として發刊します。

一碧樓

中塚直三

大正二年四月

窖

中塚一碧樓著

東京
第一作社

春

錆小刀いちる窓梨花の晝悲し

春の宵やわびしきものに人體圖

菓子屑に似て女工等や春日照る

烏賊に觸るゝ指先や春行くこゝろ

蒲團いぢりかくて果つ女や晝霞

乳親の嫁ぐとも聞く春の雨

灰の中に生きとる虫や春日影

自像見入る時淋しみや宵の春

墓地買うて猶葬らず耕しぬ

落凧を餘所に我畑を打ちにけり

晝霞親死んで渡舟筋替えし

男着に縫ひ替へ衣(きぬ)鳴やく蛙

逃げ來しが歸りたさ浮きし柳かな

柳などあるらんか夜を着きし宿

梅も散りぬ煙草好きにて淫ら者

事の咎めなかりしに緣の遲日かな

漕ぎ負けし舸夫の大唄霞かな

爐の名殘竈漏るゝ焰見て居たり

河原畑すか〳〵と打てば日落つる

街行くに誤診の耻や飛ぶ燕

嬌聲に關せず生くや飛ぶ燕

すか〳〵と田に入りて蛙釣る兒等よ

梅に荏苒など云ひ越しつ娶りしよ

窓の藤煌くや殊に妻居ぬ日

大雨の日藤茶屋に寄りて飲む水や

兒の死顔端正と見つ藤の花

離縁話かるくと運ぶ麥青し

不逢戀

鳴る如く蛙鳴く夜の直き道

京都の友に

柳綠せり飽食に居る君か

夏

西日暑し芭蕉はあれど黄花草

風吹いてこの夜暑さの色狂ひ

葉柳のこの夕や兒と疎み居る

午後に悲し醫學へ道の青芒

暑き朝の鋸音や緑家に泊り

合歡茶屋の亭主甘い丸藥呉れて

信仰の鑛鳴る鮮に痛ましき

明易き腕(かひな)ふと潮匂ある

八百庄は醉ひ死にし葉柳垂れて

炊事部へも與りつ住めり青芒

相許せどなほ文もせず居る涼し

額廣うなりゆかん思ひ夏籠りぬ

蚊遣時淺沼に鳴く魚のあり

耳少し疼く日の團扇の白や

驚きの過ぎしに汲むや家清水

遺書抱へ來てこの旅の清水かな

緣家あれど宿とりし螢夕べかな

よべの痴態偲ぶ窓花蓮眩し

歸省して葬ひに三度來し清水

雨の蝙蝠ひた狎れ初めし友垣や

春戸若葉厨夫の戀に晝凪げり

秋

忌の事に柿のあるじが一喝よ

我死ぬ家柿の木ありて花野見ゆ

柿が羽織着し日の心鳥渡る

兒の心ひたぶるに鷄頭を怖づ

行李解かで三夜さ足りけり虫そゞろ

霧晴れの銀杏や時の默示とも

秋風のあるじ家憲に囚はれて

秋風や眼に巨魚浮ぶ漁休み

畑に見る蜻蛉の中の我家かな

秋風や發病の日に似て凪げる

秋風の沼魚に馴れて匂ひなき

赤子見て出づ門や赫つと秋晴れて

一屬吏となり了せ手帳秋晴るゝ

虫更けて掃くこども喪に居りてかな

芙蓉照るや魚を焼くしごき帯の日の

行李空しきを芙蓉の宿に置き捨てん

母亡(な)ければ悲しみに焼く柚味噌かな

惰け日の河船頭よ鶏頭花

誰のことを落らに生くと柿主が

冬

死期明らかなり山茶花の咲き誇る

鍵の錆手につく佗びし晝千鳥

富衒ふ言灯に出でつ鳴く千鳥

入嫁の前

やがて寒う見ん裝ひのきらびやか

奇蹟信ぜずも敎徒なる寒さかな

浦に育ちて池を恐るゝ道の霜

千鳥鳴く夜かな凍てし女の手

逃げて減りし鳩ともなくて返り花

敬遠の一書や霜華鳴る思ひ

煤一と日惰け遊ぶに照る池や

多かるを忘る船傳手返り花

箕焼けしばかり他事なし返り花

灰を拂ふ心に去る地なく千鳥

出郷口占

我胸に千鳥羽ばたく我足に

故郷の水の味畫千鳥なく

25694

大正二年六月八日印刷
大正二年六月十日發行

正價金四十五錢
送料金五錢

著作兼發行人　中塚直三
岡山縣漢口郡玉島町第壱
千三百五十七番地

著作兼所有　有吉黄楊
東京市四谷區尾張町五番地

印刷人　万月堂
東京市四谷區尾張町五番地
電話番町二六七八番

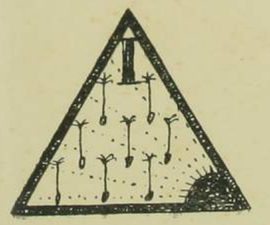
印刷所

發行所　第一作社
東京市芝區本芝二丁目三十八番地

月刊雜誌
第一作
一部金十錢郵稅金二錢
六部郵稅共金六十錢
郵券代用不苦

眞劍なる
俳句の新運動

木蓮花がどーどー散る驛夫が鉛ばかり振る　荒川敏雄
桶打てば空ーき音の二月を沈む　遠藤清平
死ぬべきか、海の潤き、冬の大いなる　林彦
鳥や父の手匣を開けて見たい　西村繁次郎
母と娘の眼光り靜かなる梅哉　西山源次郎
移住民は出發(たつ)た、水上分署(ぶんしよ)の庭に葱の花　水上靜

亀を這はせたら翼の畫のアスファルト　土居蹄花
快くだまされたー李薄明り　笠原松太郎
八つ手の花がからからに私に咲くかな　志田義秀
霞む光りが冷めたい花ふだのあーた　酒井義三郎
蟹の根性は壁に日が照つて雪解け　妹尾美雄
蓮石の滑らかなるが悲ーかる　中塚均雄
乳母は桶の海鼠を見てまた歩いた　中塚直三

發行所　東京市芝區本芝二ノ三八
第一作社